

## タンポポの恋

鬱蒼とした森の奥に小さな小さな村があって、そのボツと離れた一軒家に身寄りのない目の見えない娘がひとり住んでいた。山羊を一頭飼っていてそれはそれは可愛がっていた。山羊はいつも杖のごとく娘に付き添って左側を歩くのだが、乳を搾るときだけ、娘の方が山羊の左側に腰掛けて作業した。娘がラエビ(Laevi=左)ちゃんと呼ばれていたのは、そのせいだろう。ラエビの絞り出すお乳は苦みがあったが、多くの病気を治す効用があったし、なぜか利尿効果顕著だったので、村人たちにも評判であった。そんなわけでラエビは山羊の乳を売って生計を立てていたのである。オフィシナール(officinale=治療師)のラエビとかピッサンリ(pissenlit=寝小便)のラエビと呼ばれていたのもそのためだ。

美人ではないが愛らしい顔立ちをしていて、その屈託のない笑顔で優しい言葉をかけられると、どんな辛いことも悲しいことも吹っ飛ばしてしまうほどに気持ちが軽くなるのだった。だから、ラエビは村人たち皆にとっても愛されていた。ラエビは亡くなった母が編んでくれたという黄色いスカーフを形見としていつもそれで頭を覆っていた。それから裾にギザギザ模様のある緑色のスカートを身につけていた。そのギザギザ模様がライオンの歯にソックリだというので、ラエビにはダンドリオン(dent de lion=ライオンの歯)というあだ名も付いていた。

いつしかラエビも大人びてきて、村の若者たちの中にラエビが目も見えないのをいいことに、手始めにしようというはかる者も出てきた。しかし、そのような不埒者は、手ひどい目にあった。というのは、ラエビのスカーフには、ミツバチを惹きつけてやまない甘い香りがするらしく、ラエビに襲いかかろうとすると、その蜂たちの逆襲にあうのである。どうやら、目の見えない娘を置いてあの世に旅立つ母親が、娘の身を守るためにスカーフにそういう工夫を凝らしたようなのだ。

そんなわけで、年頃になって匂い立つような魅力に溢れるラエビだったが、恋を知らずにいた。そして、ある日ヒバリの歌に聞き惚れている内に、ヒバリに恋こがれるようになってしまった。美しいメロディーに身体芯から揺さぶられるものの、歌詞が聞き取れない。恋する相手が何を訴えているのか、知りたくて知りたくて居ても立ってもいられない。

「ねえ、ヒバリさん、後生だから空から舞い降りてきて、歌をちゃんと聞かせてちょうだい」

そう訴えたところ、ヒバリは願いを叶えてくれた。ラエビの左肩ののって、耳元に美しい歌声を響かせた。「太陽が朝一番に輝く、その煌めきのように優しく清らかに僕もラエビちゃんを愛しているよ。でも、天空の限りない広がりと高みが僕を惹きつけてやまないんだ。この引力は強大で、抗うことは不可能なんだよ」そう悲しそうに叫ぶと、ヒバリはラエビの肩から舞い上がった。ラエビは両手でヒバリを捉えようとしたが、間に合わなかった。ヒバリはたちまち天空の彼方に消えて行ってしまい、ラエビは愛の幸せを永遠に失ったことを悟ったのだった。絶望のあまり、ラエビが黄色いスカーフをはぎ取って空を扇ぐと、スカーフから沢山の毛羽が飛び散った。

折からの突風が毛羽をさらっていく。風に乗って毛羽は地上のあちこちを流離った。毛羽が地面に舞い降りたところには、まもなくラエビのスカーフにそっくりな赤い花や黄色い花が咲いた。

タンポポには多くの虫が、特にミツバチが群がる。それは、タンポポの蜜=ネクトルが極めて豊富だからだ。タンポポの種は受精せずに実をつける。種は実る頃パラシュートに乗って遠くに運ばれる。タンポポの茎から出る白い汁の薬用効果は昔から重宝されている。以上の物語は、百科事典の「タンポポ」の項目を読みながら浮かんできたものである。

セイウタンポポ *T. officinale* Weber (英名 common dandelion) とアキタンポポ *T. laevigatum* DC.

英名ダンドリオン dandelion はフランス語のダンドリオン dent de lion (ライオンの歯の意) が転訛したもので、葉の欠刻がライオンの歯に似るためだという。しかしフランスでは利尿剤に使うところからピッサンリ pissenlit (寝小便の意) とも呼ばれる。漢方では全草を蒲公英(ほこうえい)という。ステロールなどを含み、抗菌消炎作用がある。単独または他の生薬と配合して、感冒、急性気管炎、乳腺炎、尿道感染症などに内用されるほか、おてき、毒蛇や毒虫の咬傷(こうしょう)に内外両用され、解毒効果がある。(平凡社『世界大百科事典』より)



ロシア語会談通訳、作家。92年、報道の速報性に貢献したとして日本女性放送者懇談会SJ賞を受賞。95年「不実な美女か貞淑な醜女か」で読売文学賞、97年「魔女の1ダース」で講談社エッセイ賞、2002年「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」で大宅壮一ノンフィクション賞、03年「オリガ・モリソワナの反語法」でドゥマゴ文学賞を受賞。最新作に「真昼の星空」がある。

Mari Yonehara

## 米原万里